

『幼児の教育』と私

私にとって「書く」こと

田中三保子

子どもたちとともに過ごす日々の生活の中で、保育者はいつも何かしら感じたり考えた
りしている。例えばA子について、ままごとをしている様子から穏やかさを感じとり、
へきようは周りのことも考えているようだ〜と思う。「せんせい」と部屋に入ってきて、
「やって」というときの表情や語気から強引さを感じ、へどう応じようか〜と考える。帰
りの片づけのとき、A子なりにがんばっているのを見て、へきよう一日が充実していたの
かな〜と思う。一人の子どもに対してでも、そのときどきにいろいろな思いが心をよぎ
る。クラス全員に対してとなれば、きっと相当な数の思いが保育者の心の中に次々とわき
あがってきていることであろう。子どもたちに対してだけではなく、そこで行われている
ことに対して、ああしたらこうなると思い迷ったりするのだから、その数はさらに膨ら

む。保育者の頭の中は常に何かの思いや考えに満たされて
いて、保育中は普段の生活より凝縮された、実に濃密な時
間が流れていく。



子どもたちが帰ると保育室は急にひっそりとして、時間

が穏やかに過ぎていく。たくさんのことに出会い、さまざまな場面で子どもにも向き合い、
何かをし、いろいろな反応を受け取ったはずなのに、すぐに思い出せることは少ししか
ない。きょう一日に出会ったことや感じた思いは、そのあとに続くことごとや思いに押しつ
ぶされ、意識の下の方に押しやられてしまっている。片づけをしているとその場所、その
遊具で遊んでいた子どもの姿が思い出されることもあるし、唐突に子どもの表情が浮かん
だりその時の私の感情がよみがえることもある。そうしてゆつたりと、きょう一日を反芻
しながら、押しつぶされたものを解きほぐしていかれる日もあるけれど、圧縮されたもの
を抱えたまま次の日を迎えることも多い。そして、そこにまた翌日分が重ねられていく。

保育について書こうとするとき、私は日々の省察では意識の上にくいあげられなかつ
たことごとや思いをもう一度たどってみたいと思う。圧されて何が何だかわからなくなっ
てしまっているものをバラバラにして、一つ一つ吟味していくことができれば、きつと、
自分が何を感じどんなことを考え、どこにこだわって保育しているのが明確に見えてく
るような気がする。

仕事が終わったの帰り道、家事をしながら、お風呂に入りながら、何が書けるだろうかとぼんやりと自分の内に思いを馳せる。この場合、何となくそのことに意識を集中しているのが一番よいようである。そうしているうちに、ひとかたまりになってしまったことの中から自ずとはずれ浮き上がってくるものに出会う。へあ、あの時、こんなことを感じたのだった〜と思い出し、「あの時」の状況がよみがえってくる。子どもの表情や手の感触までも思い出したりする。どうしてあんな顔をしたのだろうか。私の対応はどう響いたのだろうか。よくわからなままに、でもなぜか気になりながら通り過ぎてしまったことを、もう一度ゆっくりたどってみる。へそういうことだったのか〜とその意味にこの時になって気づくこともあるし、子どもと私との思いのずれに思い当たり落ち込んでしまうこともある。そんなことを繰り返し返していると、長い期間を経ての子どもの気持ちの流れや変化、私自身の保育へのこだわりや子どもへの願いなどが見えてくるようになる。目の前のことで日々思い悩み揺れ動く自分を、少し距離をおいて眺められるもう一人の自分ができてくるのだと思う。そうすると、子どもにも自分にも、少し、優しくなれる気がする。そのことを、その子を、自分を、少しは受け入れられるようになったということなのだろうか。

私が自分の心の中を探るとき、よみがえってくるのはたいいてい、子どもの気持ちが理解できなくてずれた対応をしてしまったときのような、苦しい思いである。楽しかったこと嬉しかったこともたくさんあったはずなのに、あまり思い出さない。

子どもたちは毎日の生活の中でその子なりに自分を表現している。わかりやすい子どももいれば、屈託があつてわかりにくい子もいる。子どもの行動の意図が読みとれなくて、でもわかろうとして必死になつて、お互いに真剣勝負



とでも言いたいような向き合い方になるときがある。相手を理解できないので、どうしてもいいかわからない。でもとりあえずはなんとかしなければならぬ。私が何か行動を起こし、相手の様子を見る。相手から反応が返ればそこから、返らなければ返らないで感じたところから、また次の行動を起こす。相手も内奥の何かに突き動かされての行動であろうから、否応なしに心と心がむきだしで向かい合うことになる。そういうときのことは、子どもを抱き上げたときの感触までも不思議と思ひ出す。ほかの誰でもない、その子（たち）と私との関係の中で起きていることであり、私自身が問われているのだと思う。この、わだかまっている感覚はどこからくるのだろうか。彼は泣きやんだけれど納得したのだろうか。ほんやりと思ひめぐらしていると、たぶん私自身がもともと持っている感覚やいつの間にか身につけてきた価値観にゆきあたる。へああ、そうだったのかと思えることもあるが、それしかできなかつた自分を認められないこともある。そういつたことをぼつんぼつんと思ひ出していくと、その中に自分なりの文脈が見えてきて、ようやく書き始められるようになってくる。

ワープロに向かい綴り始める。保育は客観的事実と言えることのきわめて少ない世界であると思う。子どもの行為にしても、そこに表現されるのは私が見て感じた「事実」である。まして私が考えたり感じたりしたことは、私にしかわからない私だけの世界である。

本当にそんな感覚だったのか、一言一言自分自身に問いかけ、ことばを選ぶ作業が続いていく。この作業を通して、私はまた、保育の当事者としての自分を見直すことになる。当時は受け入れられなかったことも、書き綴るうちに、状況そのままに受け止められる気がしてくることがある。私がそうしなかつたならばと自分を責めるような気持ちも和らぎ、それはそれとして受け止め、そこからまた始めようと思えるようになってくる。こんな、自分と向き合う時間を重ねて、ようやく原稿が書き上がる。私の保育への思いがこの時やっと明確になり、題名が決まる。

私にとって「書く」ことは、消化しきれずにたまっていたものを反芻し、きちんと消化しなおすことであつたのだと、いま、あらためて思う。消化したものは栄養となる。

書いている最中には、なかなか道筋が見えてこなくて焦りを感じたり、自分と向き合うつらさに投げ出しなくなつたりもした。でも、書き終わると一山越えたような気分にもなつた。「書く」ことで、いちいち心の中を深く探らなくても、そのときに自分を客観視できる消化力も少しついた。書く機会を与えられたことに感謝している。